あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250－23
04(7182)
0861

令和4年度総会終了

6月5日(日)、午後4時からあびこ市民プラザホールにて令和4年度の総会が開催された。司会の佐々木侑役員の開会宣言の後、美崎大洋会長が議長に選出され、議案の審議に入った。当日提示された議案と採決の結果は以下の通り。

第1号議案　令和3年度事業報告

1.「40周年記念誌」のPRと販売支援

・『我孫子の文化四十年の歩み』を4月に刊行。会員全員に配布、さらに我孫子市関係者、近隣の市立図書館などにも寄贈した。
また会員の紹介、市内の書店などでの販売により年度末まで約350冊を売り上げた。

2.会員数の増強(目標、年度末100名)

・4名の入会者があったが、10名の退会者があった(3月末会員数79名)。

3.地域の歴史の掘り起こしと、郷土の文化の維持・創生

特に平将門に注目し研究を進め、以下の講演会に協力、実施した。

・10月9日(土)　湖北地区公民館(コホミン)で、「ファースト・侍！平将門さまとは」の講演会に当会役員が準備段階から協力した。
・2月11日(金・祝)「市民のチカラまつり」の一環として講演会「各地の将門伝説・伝承を探る」をあびこ市民プラザホールで実施した。
市川市、坂東市、取手市、柏市から講師を招いた。

4.史跡文学散歩の実施(年4～5回予定)

・コロナ禍で実施できなかった。

5.放談くらぶの開催(原則、偶数月、午後2時～)

・以下の講師、内容で6回開催した。
4月18日(土)　美崎　大洋氏「楚人冠小研究―こぼれ話」
6月5日(土)　戸田　七支氏「それからのまさかど」へのプロローグ」
8月15日(土)　竹下　賢治氏「柳宗悦の父楢悦と嘉納治五郎との関わりを探る」
10月17日(土)　村上　智雅子氏「志賀直哉作品『和解』と我孫子」
12月19日(日)　萩原　法子氏「タマゲル(魂消る)はなし　日本人の霊魂観」
2月19日(土)　原田　幸四郎氏「キリシタン版の発見・アーネスト・サトウの功績」

6.文学の広場掲示板への短歌6首掲示(年3回)

・手賀沼沿いの若松地区「文学の広場」掲示板に年3回、6首を1ヶ月間掲示した。

7.「美しい手賀沼を愛する市民連合会」への参加

・6月19日(土)美手連総会参加
・10月10日(日)手賀沼流域フォーラム実行委員会として「川巡りと木下の史跡散歩」を企画したが、当日、雨天のため中止となった。。
・その他美手連の理事会、運営委員会に担当役員が参加した。

8.文化活動関係団体との連携協力

・市内市民活動団体の我孫子市史研究センター、我孫子の景観を育てる会、あびこガイドクラブ、ふるさと我孫子ガイドの会と当会の5団体で「郷土資料館」設立の必要性を確認し、情報交換のための交流を継続しているが、11月26日の「我孫子市文化財保存活用地域計画」の説明会に傍聴参加した。

9.プロジェクト活動の活性化

・コロナ禍のため多くのプロジェクトは開催されなかったが、「短歌の会」は2か月毎に開催され、毎回10人前後の会員が出席した。

10.白樺派についての継続的研究・勉強

・放談くらぶで「志賀直哉作品『和解』と我孫子」講演を実施した(別掲)。
・「志賀直哉邸跡書斎修復工事基金」に寄附

11.我孫子市生涯学習出前講座の推進

・コロナの影響もあったが、1回実施された。
5月12日(水)　美崎　大洋講師「楚人冠の人となり」

その他(事業計画に掲げなかったもの)

○総会

新型コロナウイルス感染防止のため一堂に会しての総会は開かず会員宛て書面による通達にて行った。

○千葉県教育功労者表彰

令和3年度の千葉県教育功労者として我孫子の文化を守る会が千葉県教育委員会から表彰された。
千葉県教育功労者表彰は、千葉県教育委員会設置を記念して、昭和25年から、教育行政・学校保健・藝術文化・社会教育・学校教育の5分野について、永年にわたり千葉県の教育・文化の発展に寄与した個人及び団体の功績を称え実施している。今回で72回目になる。当会が表彰された「芸術文化」分野の説明には「芸術文化の普及振興、文化財の保護研究、地域文化の振興に寄与した者」と定義されている。
これに基づき11月1日表彰式が行われた。

以上のように美崎会長から逐次報告された。

第2号議案　令和3年度決算及び監査報告

決算の内容について稲葉義行会計幹事から説明があり、その後芦崎敬己監査役から「適正に処理されている」との監査報告があった。

その後、第1号議案、第2号議案について採決が行われ、その結果、原案通り可決承認された。

第3号議案　役員選任(案)

(会長)美崎　大洋
(副会長)村上　智雅子、佐々木　侑、稲葉　義行(会計幹事)
(幹事)伊藤　一男、戸田　七支、斉藤　清一、牧田　宏恭、佐藤　やす子(会計幹事)
(監査)飯高　美和子、芦崎　敬己

役員名に三谷和夫名誉会長、越岡禮子顧問の表記が無いとの指摘があったが、異動のないことを確認した。

採決の結果、提案通り可決承認された。

第4号議案　令和4年度事業計画(案)

1. 白樺文学館との連携強化と同文学館リニューアル方針への協力
2. 『我孫子の文化四十年の歩み』のPRと販売支援
3. 地域の歴史の掘り起こしと、郷土の文化の維持・創生
4. 史跡文学散歩の実施(年4～5回予定)
5. 放談くらぶの開催(原則、偶数月午後2時～)
6. 文学の広場掲示板への短歌6首掲示(年3回)
7. 「美しい手賀沼を愛する市民連合会」への参加
8. 文化活動関係団体との連携協力
9. プロジェクト活動の活性化
10. 白樺派についての継続的研究・勉強
11. 我孫子市生涯学習出前講座の推進

以上の事業計画(案)について美崎会長から示され、その後、採決の結果、原案通り可決承認された。

第5号議案　令和4年度予算(案)

稲葉会計幹事から説明があり、原案通り可決承認された。

(第2号議案(決算書)、第5号議案(予算案)の詳細については別紙参照)

第四十回記念文化講演会

総会に先立ち午後2時から同会場にて第四十回記念文化講演会が開催された。

「村川別荘と我孫子　嘉納治五郎との絆をたどって」を聴いて

牧田　宏恭

6月5日(日)、「あびこ市民プラザホール」にて、表題の講演会が催された。当日は、コロナ禍もようやく収まる兆候を見せる中、久々に50名を上回る聴講者を迎えての開会となった。事前のPRも功を奏したようで、一般の方の参加もあり、演題への関心の大きさを感じた。

講演者は、西洋古代史研究で名高い、村川堅固・同堅太郎　父子(故人)の堅太郎の養女「村川夏子　氏」(写真1)である。余談だが、小生が65年ほど前の高校生時代、世界史を学んだ時の教科書(山川出版)の著者に、村川堅太郎の名前があったことを想い出す。

講演の冒頭、村川夏子氏は、今、敢えて取り上げることでもないが、自分が、村川堅太郎の長女であると広く紹介されていることに触れ、実際は、堅太郎の弟(正二)の子であって、事情により後に堅太郎の養女となった事を、我孫子の「村川別荘新館」建ち上り時(昭和3年)の家族記念写真の紹介を交えながら触れた。

続いて講演の主眼は「村川堅固が嘉納治五郎から受けた影響」を探ることで三代にわたって居住している現文京区目白台の自宅(指定文化財：文京区)に遺された歴史的資料を踏まえて進めるとの断りがあった。

以下その内容を「レジュメ」と「パワーポイントの映像」を用いた説明の順序を追って記述する。

1. はじめに

「東京文化財ウィーク2019」(東京都の文化財行事)で自宅を公開した際、床の間に嘉納治五郎の軸を掛け、展示では戦前の幻となったオリンピック招致で名高い永田秀次郎にも触れたとの話があった。

また、村川堅固・堅太郎の我孫子とのかかわりについて、堅太郎が強調したのが、「私は45年という長期にわたって別荘を維持し、その間には苦労もあり、親の堅固の29年間の比ではないのに、我孫子に行くと堅固の話題ばかりだ」とぼやいていたことも紹介された。

2. 熊本時代(堅固)―嘉納治五郎との出会いを中心に

村川家は、肥後細川藩の藩士であった。

村川堅固は明治8年熊本市内で誕生、西南の役で自宅焼失などの苦難を経て、明治21年、熊本の第五高等中学校に入学した。当時、講義は原書を用いて行われ、英語専門学校の趣さえあって、修業年限は補充科2年、予科3年、本科2年だった。このため堅固は計7年在籍したが、在学途上で学制が変わり第五高等学校(修業年限3年)になった。(写真2)は学友と撮った写真(堅固16歳6か月)で面差しには未だ童顔が残る。この直後の明治24年秋、嘉納治五郎が同校校長として着任し、早速柔道の指導に当たるとともに、剣道、弓道などの振興も図った。堅固にとって治五郎は父か長兄の如き存在だったであろう。治五郎は自治会活動を一本化して名称を「龍南会」とし、会報「龍南会雑誌」を発行した。堅固は第7号から編集委員を務め、これが後々まで続く治五郎との絆の契機となった。また治五郎は英語教師として、「ラフカディオ・ハーン；小泉八雲」を招聘し、治五郎、ハーンの二人に儒学者の秋月悌次郎(会津藩士：佐幕派、投獄され後に赦免)を加えた三人は同校の当時の名物教師だった。治五郎は1年余りの短い在任後帰京する。治五郎の送別会の時の様子(写真3)には、この3人が中央に写っている。

明治28年、堅固も上京し、東京帝国大学に進学した。熊本を離れ、汽車、船、汽車と乗り継いで東京に向かう途中の様子を母への手紙に記しており、京都七条にあった「停車場」を見て「すてーしょん」と呼び、物珍しさや、騒々しさに驚く様を綴っている。都会慣れ

村川堅固　明治24年7月2日　齢16年6ヶ月

しない堅固が治五郎を頼りにしたことは想像に難くない。

3. 上京・結婚・留学(洋行)――併せて嘉納治五郎との繋がりも

明治30年、治五郎は少壮の士に柔道を通じて人格形成することを図る「造士会」の設立と、それを知らしめる会誌の発行を企図していた。それは当初「精力雑誌」とよばれ、治五郎邸で行われた打ち合わせに帝大生の堅固も参画している。同じ頃、堅固は大学院進学の希望を抱き、治五郎に励まされて、その意を固くした。

雑誌発行に関わったことが治五郎と堅固の絆、また堅固の行く手を決定したと言えよう。

「精力雑誌」は翌年、雑誌「國士」と題して発行され、これは一旦休刊の後、雑誌名を「柔道」、「有効の活動」、「大勢」、「柔道界」、「柔道」、「作興」と変え、発行元も「柔道会」から「講道館文化会」に変った。これらは「啓蒙雑誌」というべき性質で、「生まれ甲斐のある人になれ～人生相談」の意味合いが強いものだった。なお昭和5年発行の専門誌「柔道」は今も続いている。

明治35年、堅固は「西洋古代史」研究を目的として文部省の海外留学生に選考され、翌年から3年余り渡欧。ドイツ・ミュンヘンを皮切りにライプツィヒ、ベルリンで勉強し、北アフリカ、パリ、ロンドン、ローマ、シチリア島、ギリシャ、エジプト等々広く回り、明治39年初夏に帰国した。なお、留学に先立ち明治34年、武田房(ふさ)と結婚している。帰国後、東京帝国大学の助教授に就任。

4. 堅固帰国～家づくり

帰国後、隅田川縁の細川侯爵家離れに住まいを設け、明治40年長男・堅太郎が誕生。翌年から、治五郎が開学に関わった日本女子大学校(現日本女子大学)の教員も務めた。且つ印税収入も増え、妻「ふさ」がペンで横書きの家計簿をつけ始めるが、支出に「ローマ字」の項が頻出。これは嘉納治五郎が発起人に名を連ねる明治38年発足の「ローマ字ひろめ会」に入会したことに依る。

当時の付近地図(写真4)を見ると、細川侯爵邸、日本女子大学校、嘉納治五郎邸と村川との位置関係が分かる。「講道館　歴代道場めぐり(7)開運坂道場(講道館資料室　本橋端奈子著)」には、治五郎が明治40年頃、大塚坂下町一帯の土地を購入し、その一部に立派な大きな道路を敷き、開運坂と命名。且つそれを東京市に寄付し、この傍に自宅と開運坂道場を設け、ここで女子柔道を本格化させたことが書かれている。

堅固は明治43年、嘉納邸、及び義父が住む細川侯爵邸に近い小石川区・雑司ヶ谷(現文京区・目白台)に土地を求め、開墾して自邸建設にかかり、翌年竣工した。遺された書簡と家計簿から推し、この家は治五郎に借金して建てたと考えられる。

5. 我孫子別荘(明治末～大正12年)

明治44年、嘉納治五郎が、我孫子(天神)に別荘を設けた。「作興6号(昭和2年発行)」に掲載された(写真5、6)は別荘の建物「臨湖閣」と手賀沼の眺望。手賀沼は、当時杉村楚人冠らと共同作成した絵葉書に

臨湖閣から見下ろした我孫子

「安美湖」と紹介されている。この後、柳宗悦が治五郎の声掛けもあって我孫子に居を構え、バーナード・リーチも宗悦宅に陶芸窯を設けるなど活動したことは広く知られている。

一方、村川堅固は、大正6年に我孫子・子の神に別荘地を購入。翌年年初の堅太郎の日記には、綿貫哲雄(治五郎長女の夫)の案内で堅固・堅太郎父子が我孫子の土地を見に来た時の様子が詳述されている。綿貫は土地購入の実労も取っている。堅固は大正10年、我孫子宿本陣の離れを取得、移築した。これが現在の母屋(本館)である。

他方、同年、治五郎は自宅周辺が小石川区の辺境のため不利益を被っていることを憂い、隣保相助けて共同でことを行うため町会を発起した。また11年には「講道館文化会」を興し、堅固は主事に選任されている。この時に発行された雑誌「大勢」は治五郎の考えの根幹をなす「精力善用」の下、生活改善誌という性格を前面に出し、嘉納須磨子夫人始め女性も執筆に加わっている。堅固は帝大生の頃から嘉納夫妻の有様を目にしており、事業の共同運営者的な夫婦像の影響を受けたと考えられる。

また堅固自身、「大勢:4号」に「住食衣主義を提唱す」という論を著し、「住まい」即ち「住」の大切さを強調して、世に言われる「衣食住」の表現に代えて「住食衣:住食衣主義」を唱えている。

さて、雑司ヶ谷町の村川家の向かい側には大正8年以来、後藤新平東京市長の下で助役を務めた永田秀次郎が住んでいた。12年、永田が第8代市長に就任して間もなく東京は関東大震災に見舞われ、永田の指揮の下、非常時の収拾と、それに続く再建が行われた。

なお関東大震災直後から村川家家計簿の支出に「町会」の項が現れ、雑司ヶ谷町でも町会ができたと考えられる。

(※ 堅太郎は堅固の住食衣主義について、堅固が「大きな木があること」が大切だ」と語っていたと述べているが、「大勢:4号」では樹木に言及していない)

我孫子別荘　新館竣工　昭和４年５月か？

6. 新館建設(大正末～昭和初期)

堅固は大正14年に朝鮮・楽浪遺跡(現在の北朝鮮・平壌付近)発掘を視察し、朝鮮建築に惹かれるものがあったとみえ、その様式を取り入れ、同敷地内に新館(昭和3年)を建てた(写真7)。しかし新館入口の形状は理解に苦しむところがあり、堅固の二人の息子はこれを全く評価しなかったそうだ。なお写真に写るのは堅固夫妻の長女一家。

7, 昭和戦前(昭和3年～終戦)

食糧増産のため干拓の動きは元々よりあったが、それがいよいよ「手賀沼」でも現実化を帯びる中、自然環境の保存を求める嘉納治五郎、杉村楚人冠に村川堅固も加わって、昭和3年 農林大臣あて「干拓反対の陳情書」を提出した。治五郎がいち早くこれに着手したのは、大塚坂下町町会設立の体験もあってのことと思われる。

昭和5年、第14代東京市長に再就任した永田秀次郎は「帝都復興・都市復興(東京)オリンピック招致」を起案、嘉納治五郎のIOC委員としての招致活動が始まったが、日本はその頃から政党内閣が衰退し、国際連盟から脱退(昭和8年)して世界から孤立していった。治五郎はその中でも精力的に招致活動を行い、それを報告する永田秀次郎宛の手紙(国会図書館デジタルコレクション)が残っている。11年のIOC(ベルリン)で4年後の東京オリンピック開催を勝ち取ったが、昭和13年IOC総会(カイロ)からの帰国途中、船中(氷川丸)で不帰の人になった。「柔道:昭和13年6月号」の嘉納治五郎追悼集に堅固は「熊本時代の嘉納先生」を寄せ、治五郎の胸を借りて柔道の稽古をしたと書いている。また講道館2代目

母屋　瓦屋根に改修(昭和43年)以前

館長・南郷次郎の書簡には、堅固が治五郎没後も講道館で「西洋史」の講義を続けていたことが記されている。

8. 戦後～現在

村川堅固は終戦直前、「村川別荘・新館」を止む無く他人に貸し、疎開先の関西で他界した。長男：堅太郎は裁判を経て、昭和42年、これを取り戻し、それ以降、母屋の大改修はじめ邸内の整備を図り、通常非公開ではあったが多数の見学者を受け入れ、我孫子市の史跡ガイドブックにも取り上げられた。堅太郎が最後に手がけたのは新館入口の改修で、これにより現況の形状になった。（もしも写真7が残っていなければ、私たちは元来の姿を知る事はなかった）堅太郎の死後は、物納による国有化を経て我孫子市が買い取り、「旧村川別荘」として母屋(写真8)と併せて公開され、平成18年から、市民ボランティアの手によってガイドが活発化し、嘉納治五郎や白樺派の文人たちと同様に、広く市民の知るところとなった。

前述の永田秀次郎邸は戦後、長野県関係の宿舎となり、平成元年、建て替えに伴ってクスノキが伐採されるところだったが、村川堅太郎が「座り込み」し、近隣住民とともに「樹木保存の嘆願書」を提出。その結果、現在、クスノキ3本が並木を成している。その事実にふれ、夏子氏は**「残ったのはクスノキだけか」**というセリフを強調された。「建屋の現状保存だけでなく、歴史資料が残り、繙けることが宝物だと」。

連載②
稲村雑談寄稿―我孫子の文化を守る会へ―

我孫子市白樺文学館　学藝員　稲村　隆

(2)白樺・民藝の息吹―柳宗悦・志賀直哉・武者小路実篤―

「白樺派とは何ですか?」と文学館で何度質問されただろう。私も文学館に勤務したての頃は質問する側であった。しかし当時用意されていた答えは、私の想いを満たすものではなかった。地域博物館、地方自治体直営の博物館が担うべき使命として、地域の歴史を掘り起こし、調査研究、保存活用していくというものがあろう。着任以来、意識したのは、「白樺派にとって我孫子はどのような存在であったか」ではなく「我孫子にとって白樺派はどのような存在であるのか」ということである。

「白樺派にとって我孫子はどのような存在であったか」という問いは、文字通り白樺派のメンバーにとって我孫子滞在時における文学史上、美術史上の位置づけを求めるものである。それぞれ柳宗悦にとっては「出会いと絆の地」、志賀直哉にとっては「創作の地」、武者小路実篤にとっては「思索の地」と位置づけた。

では「我孫子にとって白樺派はどのような存在であるのか」というのはどういうことだろうか。我孫子という郷土史、自治体史として、「通史的」に考察した時にどのような位置づけ、評価ができるか、ということである。つまり主語が「我孫子」なのである。ここに小さくも大きな違いがある。

我孫子にとって白樺派は、多くの文化人を我孫子に引き寄せ、現代にも続く我孫子の文化の基礎になった存在であり、近代我孫子の象徴的存在といえるだろう。そしてそれは、日本近代文学、美術史上、彼らが果たした功績(白樺美術館構想、民藝運動、新しき村、「暗夜行路」の創作など)にとっても重要な時期であった。現段階で私はこのように位置付けている。

しかし残念ながら彼らの我孫子時代を紹介する文学館所蔵資料、作品が乏しい。具体的には我孫子時代の原稿、書簡、美術作品、写真など、文学館所蔵のものはごくわずかである。近年では前回紹介した原田京平関係資料や、志賀直哉五女の嫁ぎ先である山田家コレクションの寄贈などもあり、我孫子時代の資料もすこしずつではあるが集まってきている。

今述べたように、調査研究、資料収集(楽藝営業?)に努めているが、それをしてなお、我孫子時代の資料は乏しいのが現状である。そもそも我孫子ゆかりの白樺派たちはそれぞれの博物館におさまっている。柳宗悦なら日本民藝館、武者小路実篤なら調布市武者小路実篤記念館、志賀直哉は2016年遺族より日本近代文学館を中心に資料が寄贈されている。(弊館にもほんの一部資料が寄贈されている。)

列挙した博物館との連携強化のため、大きな動きとして「我孫子市文化財保存活用地域計画」がある。これはモノとしての「文化財」の保存・活用という柱ばかり注目されがちだが、本文にもあるように「地域という意識が薄れつつあるなかで、地域の誇りであり、アイデンティティーでもある文化財を次世代に継承すべく、文化財を保存・活用していく」とある。

したがって「地域の誇り」として白樺派の人々を顕彰することは重要であろう。このように記すのは、文学館が所蔵する資料は、2022年6月現在において、文化財に指定されているものはないからである。(志賀直哉邸跡書斎は、我孫子市指定文化財である。**画像①**)

計画では、「我孫子市の特徴から4つの「ものがたり」」を抽出し、「我孫子市民が市の歴史や文化に興味や関心を深めることができ、近隣市や都心から日帰りで気軽に訪れることができるまち」を目指すと計画作成の意義で謳われている。(参照:「序章　我孫子市文化財保存活用地域計画作成の背景と目的　①我孫子市文化財保存活用地域計画作成の意義」我孫子市教育委員

会編『我孫子市文化財保存活用地域計画』我孫子市教育委員会、2021年）

ではここでいう「ものがたり」とは、どのように定義しているのだろうか。計画では次のように説明している。

・我孫子市では、市民や地域にとって「大事なもの」「価値があるもの」を「我孫子遺産」としている
・「我孫子遺産」同士を結び付けていくといくつかの「ものがたり」を作ることができる
・「ものがたり」をつくることで、我孫子市の歴史文化にまつわる魅力をわかりやすく伝えることが可能になり、また、「ものがたり」を通じて我孫子遺産を総合的・一体的に保存・活用することが、我孫子市の地域アイデンティティーである歴史文化の持続につながる。

（第3章　我孫子市における文化財調査の概要と保存・活用の課題及び方針　③保存活用の基本目標『我孫子市文化財保存活用地域計画』）

具体的に白樺派、白樺文学館が大きく関係するものは「まちのものがたり」「みちのものがたり」であろう。（「みずのものがたり」、「伝承のものがたり」も個人的には解釈次第で含めることは可能と考える）

前回の（1）で書いた別荘地の話は、交通網の発達、景観の良さから文化人たちが集まるという話であり、計画では「まちのものがたり」に位置付けられている。白樺派や杉村楚人冠たちが残した小説、随筆は、我孫子のまちの様子が描かれ、失われつつある近代我孫子の様相を過不足なく、令和を生きる我々に伝えてくれる貴重な「我孫子遺産」である。私のお気に入りは1921（大正10）年、我孫子を旅立つ柳宗悦が『白樺』に掲載した「我孫子から」である。特に気に入っている部分をいくつか紹介したい。（以降①～④は柳宗悦「我孫子から」『柳宗悦全集』第一巻、1981年、筑摩書房から引用）

①「七年近くもゐた我孫子に対して、今更に愛着を感じてゐる。去るとなると名残おしい。功利的な事より知らない土地の人には遂に親む情を持ち得なかったが、一見して平凡に見えるこゝの自然には年と共に離れられない様な気持ちを加へた」

おそらく読者たちがひっかかるのは「功利的な事より知らない土地の人には遂に親む情を持ち得なかった」というところだろう。もちろん志賀直哉の我孫子時代の作品には、地元の人々との交流が描かれ、杉村楚人冠の湖畔吟社は、地元の人々を巻き込み活動している。しかし柳は我孫子を出る際にこのように残している。これをどうとらえるか。私は敢えてこれについて紙面上では言及しない。私は「小売的」なのだ。もし気になれば、文学館でのイベント「稲村雑談」に参加してほしい。6月からは毎週1回開催している。（詳しくは我孫子市広報、我孫子市HPなどで確認してほしい）もし興味を持ち調べられるのならば、同時代的に「功利的」というのがどういう定義であるのかを意識してほしい。（児玉聡『功利主義入門』ちくま新書、2012年ほか）

もう少し柳の言葉を紹介しよう。

②「我孫子に来てから一家を賑やかにしたのは子供だ。吾々の処には二人ゐる。志賀の所はほんとは四人だが、二人は我孫子で亡くなつた。こう云ふ時にはこゝはこまる。志賀や康子さんはその記憶がいやで何度も引越そうとしたが、然し又こゝを離れられず、新しい室〔マヽ〕など建増しした。」

志賀にとって我孫子は「創作の地」だった。「城の崎にて」、「和解」、「小僧の神様」、「流行感冒」、そして「暗夜行路」の連載開始。しかし「和解」に描かれるように、志賀にとっては、我孫子は我が子を失った場所でもある。「稲村雑談」には次のようにある。

「我孫子時代の生活は、色々面白いこともあつたが、随分退屈もした。かういふ刺戟のない田舎生活といふものは若い夫婦にとつては、それだけで悲劇の起る可能性のある危険なものだと思ふ。〔中略〕僕の場合は家内が悲劇向きの女でないので大した事にはならなかつたが、さういふ意味では我孫子の生活は余りいい生活とは云へない」（「稲村雑談」『志賀直哉全集』第8巻1999年、岩波書店194頁）

元来文学少年ではなく、歴史好きの三十路余りひとつの私からすれば、志賀の率直な言葉に納得する思いだ。字面だけの一方的な理解をしてはいけない。「想像の翼を広げて」とNHKの朝の連続テレビ小説「花子とアン」のセリフをふと思い出す。妄想ではない。知識、経験を駆使して推し量ってほしい。とかく断定的、決定的な答えを欲しがる現代人だが、そう簡単に答えは出ない。文学館に勤め始めた時に強く感じたことだ。しかし、一時的な答えはださなくてはならない。正確に述べれば、研究動向、資料状況など情報収集分析によって、客観的、中立的妥当性のある「現段階的」な回答である。つまりこの線であれば、間違いとはいえないというラインを見極めることである。志賀たちはそのような感覚が鋭敏だったように私は思う。

③「然し我孫子での生活は是等の事のみではない。こゝが長い間の仕事場として、忘れ難い記憶を吾々に与へる。武者は我孫子で短い間に四五冊の本を出したらう。リーチも七度程本窯を焼いた。」

武者小路実篤にとって我孫子は「思索の地」であった。志賀の「稲村雑談」がすっきり説明しているからそれを引用しよう。

「我孫子に来て間もなく、根戸といふ所の、沼を見下、遠く富士などの眺められる岡になつた松林を、安いので千四五百坪買つておいたが、丁度その頃武者小路が医者に胸が悪いといはれたといふので―我孫子は本当は健康地ではなかつたが、それを知らない時で―僕は僕の買つた地所に家を建てる事を勧め、武者が其所へ住む事になつた。武者を勧めて、自分だけ京都へ引越して了ふわけに行かなくなり、それに武者や柳など一緒になつて賑やかにもなつたし、結局京都へ行く事は止めにしたが、武者の胸の病気は医者の誤診といふ事になり、一年経たないうちに新しき村を始め、九州へ行つてしまつた。」（「稲村雑談」『志賀直哉全集』第8巻1999年、岩波書店188頁）

新しき村についても細かく言及はしない。本人が当時次のようにいっているからである。「新しき村の説明することは非常に難かしい。自分達は説明しやうとす

ると、新しき村の内容を狭くする恐れがある。［中略］皆自分でよく考へてほしい。一番よく考へてくれた人が新しき村の精神を一番理解した人である。」（「新しき村」1920（大正9）年『新しき村』3巻7号掲載、『武者小路実篤全集』第4巻1988年、小学館より引用）

武者小路の旅立ちは、今日も続く「新しき村」という理想を「思索」し、熟成させた結果なのだと私は思っている。

ともかく武者小路にしても、志賀にしても、柳にしても我孫子で執筆活動が進んだことは間違いない。

④「思想の暗示やその発展に、自分はどれだけ我孫子の自然や生活に負ふた事であらう。静かなもの寂しい沼の景色は、自分の東洋の血に適ひ、又東洋の思想を育てるに応しかつたと自分は思ふ。余の思索に何か静かな一面があるなら、余はそれを主として我孫子の七年間に負うてゐると思ふ。」

我孫子は柳にとって「民藝」へと続く「出会いと絆の地」であった。朝鮮陶磁器への開眼、浅川伯教、巧兄弟との出会い、バーナード・リーチとの絆、濱田庄司との出会い、式場隆三郎、吉田璋也など多くの出会いと絆によって「民藝」へと歩み出す。

そして白樺派としても「白樺美術館構想」を発表したのが、柳たちが我孫子に住んでいた頃だった。ロダンなど後期印象派の作品を買い集め、美術館を創りたいという理想。残念ながら形にはならなかったが、倉敷の大原美術館に行けば、白樺派が手に入れたロダンの彫刻を見ることができる。大正期、我孫子の柳邸書斎に置かれていたことは日本民藝館所蔵のリーチの素描作品「我孫子・書斎の柳」（1918）からうかがい知れる。

しかし、武者小路、柳、志賀の順番でそれぞれ我孫子を旅立っていく。彼らにとっては、若き日の「いつときの場」が我孫子なのである。だが、彼らの残り香が、文化人を呼び寄せるのだろうか。春陽会の若手画家たちが集う時代となる。文化空間「我孫子・白樺派」を継ぐ者、原田京平たちの時代である。

続く。

追伸

刺激的な引用だったのではないだろうか。オチをつけておくならば、彼らは当代随一の文化人であったといえるだろう。現代的に言えば、一流芸能人、フォロワーのたくさんいるインフルエンサーとでもいえるだろうか。影響力のある人物たちだった。だからといって、我々と同じ人間である。2011年公開の映画「聯合艦隊司令長官　山本五十六―太平洋戦争70年目の真実―」で役所広司演じる山本五十六は、記者役の玉木宏に向かって次のようにセリフを言う。「眼も耳も心も大きく開いて世界を見なさい」。筆者の思考が段々わかってきただろうか。これが稲村の稲村雑談である。

また前回の連載①について少々補足をしたい。

「幕末・明治生まれの人たちには、自分を育ててくれた郷土、社会に自分の力を還元していこうという意識が強く、芸術や文化のために投資するという動きが盛んだった。白樺文学館を建てた佐野力氏も、そういった意識があったのだろうと推測する」

佐野氏は、小樽出身で我孫子出身ではないが、一時住んでいたということ、自らの大学の先輩にあたる小林多喜二が敬愛したのが志賀直哉であったということから、文学館設立につながっている。

「名前の略称から島久別荘と呼ばれていたようで、それは画家、歌人であった原田京平（恭平・聚文・和周）宛の志賀直哉書簡からわかる。」

画像の葉書を読まれただろうか。葉書の宛名は「千葉県我孫子町島田別荘原田恭平様」となっている。お詫びして訂正したい。

「現在原田京平の資料について所蔵しているのは管見の限り白樺文学館だけであり」

原田京平に関する資料は、近年すこしずつ親族、関係者を中心に発見されている。また今年度市場に出回った作品一点を入手できた。秋の展覧会で初公開予定である。昨年は山田家コレクションからも原田京平に関する短歌雑誌『白樫（しらがし）』が発見され、企画展「山田百合子と原田京平―我孫子への物語―」を開催した。つまり、博物館、美術館などの資料所蔵機関においては管見の限り、原田京平を顕彰するような意味で所蔵しているところは見当たらないということである。

その他言葉足らずな部分があるかもしれない。しかし読者の「眼」、「メディア・リテラ」を信じたい。

（次回以降の予定）

（3）文化空間「我孫子・白樺派」―原田京平、三岸好太郎、三岸節子、甲斐仁代、中出三也―

（4）ポスト「我孫子・白樺派」―大正100年を迎えて考える我孫子の未来―

企画展「式場隆三郎と民藝運動」を観て

稲葉　義行

五月二十八日（土）、美崎会長以下新入会員を含め十一人で、JR総武線本八幡駅から徒歩十五分程にある市川市文学ミュージアムで行われている「式場隆三郎と民藝運動」企画展に行ってきました。

平成二年に我孫子市で開催された「山下清展」で山下清と深い関係があった式場隆三郎に関する説明がなかったことに民俗学の萩原法子氏が会報「あびこの文化」第一七九号で疑問を呈しておられました。私は「式場隆三郎」がどの様な経歴の方か分かりませんでしたが、今回「式場隆三郎と民藝運動」の企画展を観覧に行く話がありましたので、参加することにしました。

前日は朝から雨が降っていて、天気が心配でしたが、当日は晴天で気持ちの良い一日を過ごすことができました。

市川市文学ミュージアム企画展示室は作家の永井荷風、井上ひさし、脚本家の水木洋子邸等の市川市に在住した文化人を紹介した展示コーナーや地元出身のジオラマ作家山本高樹氏の「永井荷風終焉の家」や「水木洋子邸」とうのジオラマが展示されていました。

さて、企画展でありますが、民藝とは柳宗悦が「蒐集物語」で述べていますが、民間で用いられた無名の健康な実用品でそこに健康な美が宿るとし、その美を生活に活かすことを目指して活動したのが「民藝運動」です。式場隆三郎は一八九八年新潟県中蒲原郡五泉町(現・五泉市)に生まれ、新潟医学専門学校(現・新潟大学医学部)在学中「白樺」に影響を受け、柳宗悦、武者小路実篤らの知遇を得、昭和十一年市川市に移転し、国府台病院(現・式場病院)を設立しゴッホの研究や複製画展、山下清の支援・紹介活動等多彩な活動を行っています。民藝運動に本格的に参入したのは市川在住時代です。昭和十一年に開館した日本民藝館に品物が「活き活きと」並ぶ光景に大きく心を揺さぶられ、自らの内に豊かな空想や想像力が生まれるのを実感し、精力的な活動を始めました。本展は式場が民藝運動に「活きた」筋道を「礎」、「活」の二部構成で紹介しています。

第一章「礎」では、日本全国を巡歴し固定した形式にとらわれることなく無心に仏像を刻み続けた江戸時代の遊行僧・木喰明満(もくじきみょうまん)の調査研究に民藝運動の萌芽がある。没後一世紀の間忘れられていた彼の存在に光を当てた最初の人物が柳宗悦です。

式場も「木喰仏世に出づるまで」『宿命の藝術』で「私も柳氏と共に、憑りつかれた者のように上人の足跡を追ったのであった。」と書いているように東京府大井町(現・品川区)で神経科医院を開業していた式場も「木喰五行研究会」東京支部の代表となり調査や展覧会を通して普及宣伝につとめました。

大正末期から昭和初期は民藝運動の揺籃期であった。大正十五年四月に陶芸家・富本憲吉、河井寛次郎、濱田庄司、柳宗悦の連名で「日本民藝美術館設立趣意書」が発表され、程なく柳の「下手(げて)もの〻美」「工藝の道」等の著作によって工藝の意義とその問題とが世間に鮮烈に提示されます。式場はこの頃郷里の母校で研究生活を送っていましたが、「越後タイムス」の関係者である吉田正太郎や田中豊太郎に連なり、この新しい思想の普及に緩やかに参画しました。昭和二年十一月頃、新潟市内で日本、中国、朝鮮の民藝品約二百六十点からなる展覧会を主催、「新潟タイムス」の記事で、品物の選択と陳列の創意工夫が観覧者の心をつかんだと紹介され、「此の展覧会ほど、目先が変わり、且つ洗練された展覧会は今迄に無かった」と評されるほど地方都市としては先進的な試みでありました。西洋の藝術への熱狂は冷め、柳の影響により朝鮮陶磁器に傾倒していた式場ではあるが、ウイリアム・ブレイクとフィンセント・ファン・ゴッホに対する敬愛心だけは有し続けていました。そうした折、ドイツの精神科医カール・ヤスパースの『ストリンドベリとヴァン・ゴッホ』に魅了され、ゴッホ研究に着手します。式場が目指したのはゴッホの全人的な研究であり、その発展は書誌や作品目録へと繋がり、昭和七年『ファン・ホッホの生涯と精神病』上下巻**(写真右)**に結実しました。そしてここに、柳や和紙研究家の壽岳文章(じゅがくぶんしょう)の仕事との接点があります。

第二章「活」では先ず日本民藝館の開館を取り上げています。「日本民藝美術館設立趣意書」の発表から十年余の歳月を経て昭和十一年十月二十四日東京駒場の地に日本民藝館が開館しました。柳は日本民藝館を、展示を通して来館者と悦びを共有する場にすることを念じ、民藝館全体を一つの作物となるように育てていくことを願っていました。民藝館には展示品と来館者が織りなす暖かな交流の世界があり、陳列する「物」を「活かす」とは文字通りその「物」の中に生命を感じ、それを更に光り輝かせるということであります。式場は、「柳さんと民藝館」『アトリエ』の中で「この世にあるものは、一木一草でも何かに役に立つだろう。いやそれを役立てるのが意識ある人間の仕事だ。道にある石ころでも、天才によっては宝石以上に生かされるのだ。況や人間の手によって造られたものは、もっと生かす道がある筈だ。あの民藝館はこの意味で、大きな教訓を与えてくれる。(中略)民藝館は生きている。器物も建物も呼吸している。それを知ってくれる人には何時でも手を延し、一緒に歩きだそうと身構えている。」と書いています。ここには、民藝館を通じて新たなものを創造していくこと、そして「物」を活かす道は無限にあること、民藝館が有する可能性の大きさが示されています。

昭和十一年十二月に式場の独立経営になる国府台病院(現式場病院)が開院しました。(柳からは我孫子の土地を紹介されたようですが、我孫子は東京から距離があり、町も小さいので、市川市に決めたことが、昭和十一年二月の柳への書簡で紹介されています。)療養環境を重視した、従来の精神科にない明るく和やかな雰囲気の病院である。初期の経営には大きな困難が伴いましたが、式場の精神的支えとなったのは、恩師の柳をはじめとする民藝同人であったことが柳や河井寛次郎への書簡から伺えます。

昭和十四年　病院に隣接して、式場の自邸が完成しました。

基本設計は柳、実施設計と現場監理は濱田庄司が行い、その他多くの民藝同人が協力しています。民藝建築の研究者・川島智生は、従来の民藝建築で提示された三要素(洋風、和風、朝鮮風)に加え、床高さや天井高さを操作した点が式場邸の特徴と指摘しています。

民藝で重んじられた「用」とは、手だけでなく「心」で用いることを含むと柳は言う。作物にも二つの生涯があると。作られるまでの前半生と作られてからの後半生と。そして、器物の後半生は、見る者、用いる者、考える者によって育てられると。式場邸に溢れる愛用品は、式場によって目や手で用いることの他、内省や創造などの精神的な営みを繰り返し促した。式場にとって、日本民藝館を生み出した柳や同人たちの手によってつくられた家屋に住まうことは、日本民藝館での体験を日常化することに他ならない。式場は、住宅の落成を記念し、昭和十四年四月に創刊された民藝運動の機関紙「月刊民藝」の総責任を引き受け、民藝運動に本腰を入れていきます。

式場が民藝運動に本格参入した頃は、折しも、式場が精神疾患を患った家主によって建築された個人宅「二笑亭」や八幡学園の顧問医となって山下清と出会った時期と重なっています。式場の著述からは、彼等の営為を民藝の枠組みの周縁へと位置付けようとする意図が垣間見えますが、民藝同人もまた、式場からの影響からか、彼らについて民藝理論とのかかわりで、度々言及しています。式場は、後に、「工藝以外の領域にも「民藝思想」を出していきたい」と語っています。

昭和十三年に千葉県図書館で開催された、山下清と石川謙二の二人展について、柳に宛てた葉書で「あの絵は二笑亭のように世に紹介したら喜ばれるでしょう。その内先生にも見せます。実にきれいな色彩の表現で大いに工藝的でもあり、なかなか感心しました。(中略)低能児であんな仕事をしたのは珍しいでしょう。画集を出したいと思っています。河井老「河井寛次郎」のよろこびそうなものです。」と報告しています。

山下清とは、その後、昭和三十一年東京大丸で山下清展を開催(同時に知的障害児の診療と生活指導を行う)。以後、全国各地で開催の都度、山下と会場に出向き、画集や日記の刊行、作品の制作指導など後援活動に尽力しています。

当企画展を観ると、冒頭の展示説明に「柳さんはあらゆる点に於いてどんな天才にも劣らない巨人に思える」とあるように、式場の柳に対する絶大なる信頼と、畏敬の念が溢れていることが伝わってきました。

(写真は市川市文学ミュージアム前で)

本八幡の思い出
～「企画展 式場隆三郎と民藝運動」の見学・散策会に参加して～

芦崎　敬己

五月二十八日(土)朝から少し暑い位の天気に恵まれ、急きょ計画された『式場隆三郎と民藝運動』の企画展を市川市文学ミュージアムに見学に行き、近隣を散策する会に参加しました。会員全員にお知らせする時間がなく、口コミで知らされました。

市川市文学ミュージアムでの企画展や、近隣の史跡散策などの報告は、他の方にお任せして、私は「本八幡の思い出」と題して私的な感想を記したいと思います。

このように言うのは、実は、私自身が今から四十二年前の昭和五十六年三月に結婚し、以来五年間住んだ思い出多い地なのです。

散策会は、本八幡駅から千葉方面に向かって線路沿いに十五分程歩いて、市川市文学ミュージアムに行きましたが、四十二年前にはこの公共施設はありませんでした。

昔とは町の様子がガラリと変わっていました。個人商店が減り、古い家屋が消えて大きくて立派な建物が増えていました。文学ミュージアムまでの道には、懐かしい路地があって、昔行った呑み屋「おふくろ」を思い出しました。もう、店は無かったようでした。気風の良い女将と飲んだくれの主人のいる店で、日本酒は悪酔いしないからといすみ市の「木戸泉」を勧め、ビールは旨さでサッポロ黒ラベルを出していました。一年経った頃から、ビールはサッポロエビスに全面的に切り替わりました。それ以来私も四〇年間エビスビールを飲み続けています。

「おふくろ」には連れ合いとよく飲みに行きましたが、ある時飲んだくれの主人に、「おたくら夫婦は、奥さんで持っているね」などと笑って言われ、事実そういう面はあるものの苦い思いをした記憶がありました。

又、本八幡駅の北口側に、散策会でも寄って見学しましたが、現在のファミレスのサイゼリヤ一号店がありました。イタリア料理・パスタ好の私たち夫婦は、何度も食事に行きました。若い頃で薄給の身でしたので、お財布的には助かりました。

サイゼリヤから少し足を延ばすと、寿司店で「以さ美(いさみ)寿司」と言う店があり、長いカウンターに板前さんが四～五人ずらりと並んでいて、美味しいネタを握ってくれる寿司屋でした。年に一～二回の贅沢をしました。

さて、今回の見学先市川市文学ミュージアムは、大型商業施設コルトンプラザの隣にあります。私が住んでいる頃は、ありませんでした。

コルトンプラザは、ウイキペディアによれば正式にはニッケコルトンプラザと言い、昭和六十三年(一九八八年)の開業で、元々は日本毛織中山工場の跡地に建てた大型ショッピングセンターで、ダイエーグループの店舗となっています。日本毛織中山工場は昭和五十七年(一九八二年)まで操業していた様ですが、工場の記憶は私にはありません。

又、大型ショッピングセンターが建つことで、地元商店会からの反対もあった様でしたが、この点も記憶はありません。

ニュースでよく耳にした『大店法』(大規模小売店舗法)は、昭和四十八年(一九七三年)に成立しましたが、

コルトンプラザの建設は、地元の商店(小売店)を守る運動の真っただ中の時期だったのかも知れません。その後大店法は、生活スタイルの変化や非関税障壁の外圧、世界貿易機関(WTO)協定違反の疑いなどにより、まちづくり三法などの新法立法化で廃止されましたが、小売店は生き残りに厳しい時代に入りました。

そもそも私が住んでいた地域は、本八幡駅から南に十二分程歩いた東大和田一丁目の住宅街で、住居は築十年位の木造づくりの棟割長屋でした。小さな玄関と三畳間、六畳間、台所と風呂場・トイレでした。

棟割ですから、隣りとは壁一枚で仕切られているので、プライバシーは、今日ほど確立していませんでした。隣りには独身男性が住み、酒を飲んだ時には暴れ、普段は気の弱い男性でした。

ある日、仕事帰りに酒を飲んだ勢いで、部屋に置いてある木刀の先で仕切り壁の柱を突いて「煩(うるさ)い」と叫んでいました。

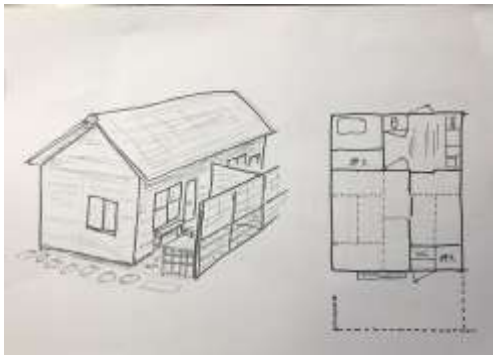
丁度、その時は、棟の反対隣に住む気の好い独身男性を夕飯に招いて、三人で食事をしている時でした。木刀の先で叩いた音に反対隣りの男性は、「こんな苛めを受けていたの」と、私と連れ合いに代わって隣の男性宅に文句を言いに行ってくれました。私も後から付いて行くと日頃の不満が爆発し、気の好い隣人と一緒になって苦情を全て吐き出しました。

このトラブルは、大声を出し暴れた男性が自ら一一〇番に電話したのですが、パトカーで到着した警察官からお灸を据えられました。と言うのも私は日頃から隣人の怒鳴り声等の苦情を警察署に相談に行っていたのです。その後連絡が入った大家さんも駆け付けて、一ヶ月以内の退去を言い渡され、いつの間にか引っ越していました。

さて、本八幡駅北口には、国道十四号線に面して『八幡の藪知らず』と呼ばれる竹藪の雑木林の一角があります。藪と言っても縦横凡そ十八mの小さな森です。ここに入ると出て来られなくなるという伝承があり、昔から禁足地でした。

ウィキペディアによると、伝承の由来は、①日本武尊(やまとたけるのみこと)の陣屋説、②平良将(たいらのよしまさ)の墓所説、③平将門の墓所説、④将門の家臣の墓所説、⑤将門が朝廷軍と戦ったとき、将門軍の鬼門に当たった場所、⑥将門征伐のために布かれた八陣の法の跡説、⑦水戸黄門が迷って出てこられなかった説、⑧昔の豪族・貴族の墓所とする説、⑨藪に底なし沼があるという説、⑩葛飾八幡宮の跡地説、⑪近隣の行徳村の飛び地(入会地)説等々多くの説がありますが、現在は囲に、自転車・バイクの駐輪場があり、伝承地・言い伝えのみで、霊力は薄れてしまったと感じる次第です。向かいにある葛飾八幡宮が管理しています。

本八幡に住んで四年が過ぎて、連れ合いは長女を授かりました。隣りの乱暴な男性は居なくなり、長女をゆったりと育てられる環境になりましたが、私の実家に空いた家が出たので、五年目の昭和六十一年(一九八八年)三月末に江東区に引っ越しました。



企画展「式場隆三郎と民藝運動」訪問記

関口　一郎

本会報第185号で標記の案内を拝見し、式場隆三郎には以前から関心を持ちながらもそのままに打ち過ぎていたところ機会を与えられたので見学してきた。

美崎会長の案内記事で、式場隆三郎(以下式場)が我孫子にも来ていることを知り、それも大きな誘いになったが、式場が新潟県中蒲原郡五泉町(現・五泉市)の出身であること、山下清の才能に注目した人であること(数年前我孫子で「山下清展」が開催されたが、式場との関係にまったく触れていなかったことに奇異を感じたことも憶い出した)などである。それともう一つあるが、最後に述べる。

昨秋から今年初めにかけての「柳宗悦没後60年記念展・民藝の100年」展にも行けなかったのが悔やまれていた。平成22年(2010)6月の「柳宗悦五十回忌法要」は、「第64回日本民藝協会全国大会」と同じ会場で行われたので、富山県の城端別院・善徳寺に行ってきた。

当「我孫子の文化を守る会」では5月28日に見学会が組まれていたが、体調整わず、6月3日、岡本和男氏(我孫子市史研究センター会長)と二人で行くことになった。

会場の「市川市文学ミュージアム」に着いてまず驚いたのは、「生涯学習センター」の3階にあり、学習センターは「メディアパーク市川」として中央図書館とも隣接し、「文学ミュージアム」自体が独立した巨大な博物館と見まがうほどの広大な建物であった。我孫子の住民としては羨ましきかぎりの環境であった。

静かな陳列室でゆっくりと見学することができたが、いくつかのものが目に留まった。そのうちの2、3件を取り上げてみたいと思う。

(1)『月刊民藝』第2巻第4号(日本民藝協会昭和15年4月)に「民藝と民俗學の問題―柳田國男・柳宗悦対談・司会:式場隆三郎:於民藝館」という資料である。こんなことが実現したんだ、と驚いた。

(2)次に、国府台病院に神経を病んで入院していた国分一太郎氏(山形県の教員、生活綴り方教育の実践者)の持っていた児童の絵のことである。

(3)三番目は後の経緯から派生したことであるが、「棟方志功の性格」という記事について興味を持った。

実は見学しながら部屋の係の方に質問をいくつかしたのだが、3階に資料室があるから、詳しいことはそちらで、と告げられていたので、展示室の見学が終わった後で3階の資料室に入ってみた。なるほど、閲覧できる資料がいくつもあった。そのなかで国分先生の登場している資料もあった。係の方に頼んで、必要部分をコ

ピーしてもらうことができた。

(2)について

式場隆三郎『宿命の芸術』(昭和書房・昭和18年・装幀芹澤銈介)の著書のなかに「異常児の繪について」(タイトル名は原本通りにした)の項があり、「國分一太郎君の持ってきてくれた山形の児童の作品から思いがけないものを發見した。」とある。国分先生は展覧会の出品で障害のある児童のはねられた絵がなかなか面白いので捨てないでいたという。

式場はそれを見て、この絵はこういう心理の子どもの作品ではないかと、一つひとつ国分先生に話したら、国分先生はその診断がよく当たっていると驚いていたこと、八幡学園にいる発達障害の児童で貼紙絵の巧みな少年(山下清)の例も出し、後に画集まで出して有名になったことも記述している。

いろいろな児童の分析のなかで、山下清については、若冲の「群鶏図」と山下少年の彩色模写を多色刷で掲載し、解説を加えていたのは興味深かった。

(3)について

(2)の記事を探していたら、「棟方志功の性格について」の記事があったので、そのコピーも依頼した。

棟方の家は代々鍛冶屋で、志功は兄二人の3番目。父は腕利きの職人で特に刃物は切れ味がよく、「棟方の刃物」と呼ばれていたという。志功は小学校時代から「画作」に興味を持っていたが、手本に忠実な「臨画」は好まず自由な描き方するので、点数はよくなかったようだ。鍛冶屋をやったり、裁判所の書記をやったりしていたが、ゴッホの絵に出合ってからは「画家になる」と決めた。兄達の支援もあって画業に集中できたようだ。そして、「…何といっても。私の眼を開いてくれたのは民藝協会の方々です。棟方志功は民藝協会からうまれたのです」と叫んでいると式場は書いている。

体格は小柄だが逞しい骨格で闘士型。腕力が強いから力強い線が生まれる。手拭をいつもぶら下げているのは汗かき症で、黒い汗が滲みでているような気がする、と式場は言う。

性格分析の方法は、50問の設問を出して「はい」「いいえ」の二択で選ばす方式である。

例えば、「議論が過激に走り易いですか」はい

「用心深いですか」いいえ

「気むづかしやですか」無反応

などである。これに外向点、無反応数などを入れた数式をつくり、「向性指数」を出す。100が理想的な両向状態、100以上は外向性傾向が強く、100以下は内向性が優勢になる。棟方の向性指数は150で外向域のⅡに当たり、正常域の最高で、超外向域ではない。超外向域をⅣ187以上、Ⅲ186～165、Ⅱ164～143、Ⅰ142～122、標準012l～100、内向Ⅰ99～78、Ⅱ77～57、Ⅲ56～35、超内向をⅣ34以下とする。外向Ⅱから内向Ⅱまでは正常域とする。

棟方は「天下の奇人」のように見えるが、本当は質実で常識に富んだ男であるという一部の批評もこの結果が暗示していると、式場は言う。

さらに「ブールドン氏抹消試験」の結果は、注意力に相当鋭く、精神作業能力も旺盛であり、微細な仕事に秀でているという。そして健康人の最高位の活動性が棟方の本態であると言っている。そして最後に「私は棟方の天才を否定したのではなく、ただ物指しに測れないような逸脱者や奇人でないことを主張したかったのである」と言っている。多角的な面からの精神科医らしい分析である。

さて、(1)で取り上げた「民藝と民俗學の問題」であるが、資料室には現物の資料がなかった。係の方が式場病院にいる山田真理子学芸員を呼んできていただいた。いろいろと話を交わしているうちに、こちらの意を汲んでいただき、企画展が終わりましたらと言ってくださった。そして、『月刊民藝』の対談の貴重な資料(コピー)が届いた。感謝である。

柳田國男(以下柳田)・柳宗悦(以下柳)・式場隆三郎(以下式場)の三巨頭の同時登場はおそらく初めてで最後であろう。対談とはいうものの、式場の発言は多く、座談会といってよい内容である。ちなみにこの昭和15年(1940)時点の3人の年齢を調べてみた。柳田65歳、柳51歳、式場42歳であった。当時とすれば柳田は高齢で、斯界の権威。柳、式場の両人が質問するスタイルになる。柳田の著書は、平易のようでいて難しい。座談でも同様である。

民俗学は「経験學」と柳田は言い、民藝は「規範學」であると柳は言う。前者は「かく在る、かく在った」と過去と現在が中心、後者は「かく在らねばならない」と現在と将来を見据える。したがって民藝は価値論が重きをなし、美術・美学などに関係するようになってくる、と柳は言う。

式場は「民俗學」と「考古學」の関係を問う。柳田は、取扱う対象が「無形か有形か」の違いで、考古學は民藝に近い、という。しかし考古學は、価値論は論じなくてもいいから、規範學的なものは持たず、民藝とは違う、と柳は言う。そして「民藝」は常に「将来性」と関係があると言う。

柳田は民藝館に集められた古い工藝品がもう一度新しい民藝として現れてくる時代があると信じていますか、と問う。柳は「われわれは遅かれ早かれ、将来において、そうした物が現れるか、現れなければならない部分がこれらの古い民藝のなかに含まれていると信じて、民藝運動を行っています」と応える。

次に、過去を対象とする民俗學と将来性を対象とする民藝の共通点について式場は整理する。両者とも庶民(大衆)を対象としていること、地方性を重視していることである。柳田、柳は古人の知恵、地方文化の豊かさを取り上げる。式場はそうしたことを含め、人間的な価値の発見を共通の要素、とまとめる。

対談では、最後に沖縄県出身の比嘉春潮氏(改造社勤務)が参加し、沖縄における「標準語問題」について論じ合う。これは民藝協会を中心とした文化団体が、沖縄に行ったときの印象で、市中に標準語(普通語)奨励のポスターが目だったこと、役所・警察を使って「方言札」を使って方言を使った者の探し出しも行われているようだという。昭和15年前後の日本の台湾・朝鮮への支配体制に繋がることが沖縄でも進めれていたようで、優れた沖縄の文化を評価している団体の立場から

行き過ぎを批判している。ただ柳田は標準語を必要とする場面の事情についての説明も加えていた。

初めに、もう一つのテーマを最後に述べると書いた。むかしむかしのこと、五泉市出身の式場隆三郎と私の故郷十日町とは「ゆかり」があると聴いたことがあった。図録の年譜によると、式場は新潟医専に在学中の大正9年(1920)9月、学友や文化団体の仲間など4人で、我孫子の柳宗悦を訪ねている。わざわざ新潟からとは、当時とすればほぼ一日は掛かりの大旅行であることをあらためて認識した。

そして、翌大正10年式場は医専を卒業。同年11月、精神病学教室助手のとき、「松沢美寿子(別の年譜には松沢ミス)と結婚したと年譜にある。

このことが故郷との「ゆかり」かと直感した。同じ新潟県中魚沼郡川治村(現十日町市)に、明治から大正期を通して繁盛した醸造業の松澤酒造があった。醸造主の松澤芳松は、郡酒造組合長・村長・郡会議員・県会議員を務めている。式場美寿子夫人はここから嫁がれているようだ、と。帰宅してから周囲の資料を調べ、地元にも訊き込んだ。私の父も同村出身、父の姉は同村の松澤家(直接の血縁ではないが関係は深い)に嫁いでいる。松澤酒造は大正の終わり頃事業を止めている。ここまでが現在判ったことで、他の資料もあり信憑性は高い。ただし、さらに詳しいことを確かめるには関係する物故者多く、時間がもっと必要となる。

当日、企画展展示室と資料室にゆっくり3時間半も滞在(?)し、それから岡本氏と食事をした。窓越しには横なぐりの激しい雨が窓や壁を叩いているようだが、中は安全だった。(夜のニュースでは市川市も大粒の雹に見舞われていたという)幸いなことに、帰りはすっかり雨も収まっていた。

それにしても今回の式場隆三郎展は刺激の多い一日であった。主催者はじめ、関係の諸兄姉にこころから感謝しなければならない。

ありがとうございました。

企画展「式場隆三郎と民藝運動」を観て

「なんて刺激的な企画展のタイトルだろう!」

式場ファンの私としては「我が意を得たり」の感である。一部には「民藝は柳宗悦」とひとつ覚えのように思っている方もいるが、ところがどっこい「式場も民藝」なのである。(7月1日付の日経新聞「文化欄」に柳宗悦についての記事があり、文中「・・・(柳が)情報発信として雑誌「工藝」「民藝」を創刊・・」とあるが、「民藝(当初「月刊民藝」)は式場が編集責任者として創刊したのでこの記事の内容は正しくない)勿論、式場自身、柳に対しては恩師と仰ぎ尊敬の念が強かったことは彼の数々の著作を見れば明らかである。柳たちが始めた民藝運動に共感、賛同した式場はその実戦部隊を自ら名乗り出てこの運動に参加した。柳が発行した『工藝』に対し、昭和14年に『月刊民藝』を創刊し、民藝運動を補強、強化する役目を担ったのだ。

今回の企画展を観て、私にとってはいくつか新しい発見があった。ひとつは式場と柳の最初の出会いについてである。二人の出会いは大正九年、式場が新潟の医学生時代に我孫子の柳邸を訪れたことであるが、その時、式場は友人3人と共に柳邸に泊ったのである。企画展会場でその手紙が展示されていた。

「・・あの日我孫子へゆき先生の旧宅を拝見して来ました。十六七年前あそこに泊めて貰った事など思い出し感慨無量でした。場所も家も申分ありませんが、たゞあの町が余りに小さく、東京との距離その他を考へると、第二候補として考にをいた方が良いと思ひました。・・・」(昭和十一年二月六日付(封書・便箋二))

文中の「あの町」は我孫子のこと。「第二候補」は自宅としての候補地である。式場が我孫子に住むことを検討したことがわかる。

発見のふたつ目は「会津の鰊(ニシン)鉢」(写真)である。式場の民藝収集品のひとつとして展示されたものの中に24㎝×18㎝ほどの四角い鰊鉢があった。私はこの民藝品とは初めて出会った。一緒に行った関口和子さんが「私の郷土、会津の本郷焼です。これに鰊を入れて保存するのです」と説明してくれた。昔は彼の地に鮮魚を運ぶのは困難で、特に冬期は積雪で一層困難だったから、この角鉢に魚を漬け(ニシンの山椒漬けなど)て保存したという。赤褐色の陶器だが、何のてらいもなく素朴だが、親しみのある民藝品だ。展示されていたものは一尾(匹)用だが、数匹を漬けられる、より大きなものもあると、関口さんは解説してくれた。

企画展を観て、かつ式場や柳のいくつかの著作を読んで感じたことは民藝運動が追求した「美」である。今までの私の民藝についての認識では民藝、民藝運動の求めるものは単に「素朴」「質素」で、地方のそれぞれの特色を表した土産品に代表されるものだった。しかし二人が書いたものを読むと以下のような表現が随所に現われる。

「(民藝品は)美術工藝品のように、作者が自分の名を残そうとするために、故意に作為をこらしたものでないから、無心で素直である。貴族的工藝や美術工藝にも各々意義があり文化に貢献する処が大きいが、何といっても特殊な少数の人の占有になる傾きがあり、生活に交わることが少なく、とかく飾りものになる。そこへゆくと民藝品は多くの人の生活に入り、生活を助ける実用品であり、しかも自然な美しさがあるので親しみ易い。」(式場)

一部の人には耳の痛い、皮肉をこめた表現で装飾的な美術品とは異なる民藝の「美」を強調している。

「生活から生まれ出る美は、用途にかない、堅実で、質素な工藝品である。それが民藝品なのである。」(式場)

「易くて、何処にでもある生活具の民藝品の美しさと意義を発見したのは、民藝論の功績である」。(式場)

「日常生活の中にとりいれられる工藝品は、華美であったり、繊細であっては用にたえない。素朴で健康でなければならぬ。そこに民藝の美が宿る。民藝が美しくなるのは、用途にかない堅実な性質をもつからである。」(式場)

「務めを果す時、人に正しい行があるが如く、器にも正しい美しさが伴うのである。美は用の現れである。用と美と結ばるもの、これが工藝である。」(柳)

などの「美」についての文章もある。

「美」の概念や定義は一般には絶対的なものではなく、個人の好みや感覚によって大いに異なると解釈される。しかし一方「万人が何となく感じる普遍的な美」があるのも事実である。民藝・民藝運動は民藝品が持つ普遍の美を求めていた。民藝運動がある時期大衆に受け入れられたのもそのあたりに答えがあったのだろう。

柳の「民藝の美」への追求は大正時代に始まった。

日本民藝館の原点とでもいうべき「朝鮮民族美術館」を大正13年、ソウルに開設する。そこに陳列された品物の多くは李朝時代の無名の職人によって作られた民衆の日用雑器で、それまで誰ひとりその美的価値を顧みるものはいなかった。しかし、柳はその美をいちはやく評価し、民衆の生活に厚く交わる工藝品のなかに、驚くべき美の姿があることを発見したのであった。民衆の暮らしのなかから生まれた美の世界。その価値を人々に紹介しようと、「民藝」という言葉を作ったのは大正14年のことであった。翌年には、民藝品の美しさを公に展示するための「日本民藝美術館設立趣旨」を発表した。ある対談で「民藝は「かくあらねばならぬ」という世界に触れていく使命がある。また価値観が重きをなしていて、美学に関係するようになる」とも言っている。

ところで式場隆三郎は精神科医でありながら、医業の傍ら、芸術家の研究、民藝運動、文筆、山下清の後援など様々な事業に携わった。特にゴッホ研究については、精神医学の視点を重視して取り組み、第一人者として活躍した。日本の現代人の「炎の人」ゴッホ観を形成する上で重要な働きをしたと言っても言い過ぎではない。

式場のこのような多才振りは逆に外からは民藝運動と式場との関係を希薄に見せる結果となったかも知れない。改めてこの関係にフォーカスすることが必要である。

式場の評価として次のようなことが言われている。

「彼を「影響を受けた思想を社会の中で活性化する能力に長けた人」とし、さらに「思想家本人が思いもよらないところまで、その思想を社会的に拡大(時に希釈)するのが式場隆三郎の才能であり本領だった」

「民藝運動をめぐる式場のコンセプトは、基本的には柳宗悦の思想を原型とするものであるが、それらが善意や良心によって包括できる水準まで拡大されている様子が窺える。」

民藝運動での式場の役割りと確かな実績を見事にかつ的確に言い表した評価と言えよう。(美崎)

あびこだより101号

・「山岳ガイドという仕事」

倉岡 裕之

世界最高峰エベレスト、ガイドとしての登頂回数も9回を数えました。コロナ前までは多いときで10ヶ月、少ない時でも半年は海外での登山ガイドをしていました。コロナが広がり始めた2020年3月にアルゼンチンから帰国するときは、トランプ大統領が日本人は米国に入国させなくなるという噂が広がっており、帰国を早めました。それ以降海外へは出られていません。

小学校5年生の時に偶然目に留まったロッククライミングの写真。「山で生きていきたい」と、子供心に思いました。中学時代、部活も一生懸命やりましたが、心は常に山に向かっていたような気がします。25歳の時にクライミング中に墜落、骨盤骨折を機に登山家になることを断念。それまでたくさん読んできた外国の山の本の舞台になるようなトップクラスの山を目指すのを断念しました。山ばかり登ってきたのでまともな仕事はできない人間になっていたような気がします。

クライマーの成れの果ては山岳ガイド、という時代でもありました。

世界の山のガイドをするうちに気がついたらヒマラヤの8000メートル峰、エベレスト、世界7大陸最高峰のガイディングが主な仕事となり今日があります。

(略歴)

- 1961年 東京都で生まれる。その後、千葉県我孫子市に移り、小中学生時代を過ごす
- 1976年 中学3年のときに独学で登山を始める
- 1983年 ネパールで初めてのヒマラヤ登山
- 1984年 ベネズエラのエンゼルフォールの登攀に成功(東京12チャンネル)
- 1985年 映画「植村直己物語」のスタッフとして北米アラスカに入る
- 1996年 世界7大陸最高峰の一つである北米最高峰デナリに登頂。エベレストを初めて訪れる
- 2000年 ヒマラヤの高峰での仕事を始める
- 2004年 8000メートル峰のガイドが本格化する
- 2006年 ガイドとして臨んで、エベレスト初登頂
- 2013年 世界7大陸最高峰の登頂をガイド側で達成
- 2018年 プロスキーヤー、三浦雄一郎のエベレスト遠征に登攀リーダーとして参加。当時80歳の登頂を成功に導く
- 2019年 エベレスト9回目の登頂を果たす
- 2020年 三浦のアコンカグア遠征に参加
- 3月以降コロナにより海外に出れず。慣れない国内ガイドも行う

世界7大陸最高峰の登頂回数が60回にせまる

その他NHKスペシャル、ミャンマー最高峰やイッテQエベレスト、イッテQ南極隊の登攀隊長を務める。国内ではミヤゾンのイッテQ登山部デビューの宝剣岳のガイドなど。**(編集注:「イッテQ!」は日本テレビK系列で放送されているバラエティ番組・紀行番組)**

「放談くらぶ」で倉岡氏の講演を予定

日時　8月21日(日)14時～16時
会場　あびこ市民プラザホール

『放談くらぶ』講演報告

「手品の実演とトーク（昔の我孫子について）」

講師　村越　邦雄氏（会員）

佐々木　侑

6月18日(土)、アビスタ第二会議室において、掲記『放談くらぶ』が実施されました。今回の放談くらぶでは講師のお話が中心ではなく主として手品の実演が中心であり、今時のコロナ禍の制約された日常生活に対して楽しい手品の実演で気分転換をして過ごそうとの企画でした。とは言っても感染防止対策もしっかり実施した中での放談くらぶでした。

講師は我孫子在住の村越邦雄氏で、アマチュア奇術界では知る人ぞ知る演技者であり、過去にはアマチュア奇術大会(読売新聞主催)で第1位を獲得した経験を持ち、NHKや民放のテレビに出演しています。

奇術の実演は、魔法の紙袋から次から次へと飲み物が入った"ツトボトルが出てくる手品で始まり、拍手喝采です。つぎに観客から出題された二桁数字を、4マス方陣に分解した数字を当てはめ、縦横斜めの足し算値を同じくする魔法陣の実演(これは笑いを誘うためか途中でわざと間違え?が発覚し一時中止)、そのあとは、どうにもその仕組みが理解できないロープ仕様の紐の切断手品をするが、最終的には一本に繋がる不思議な手品などを実演・披露しました。

煙に巻かれた状態でトイレ休憩になりましたが、後段に入る前に我孫子の昔の様子を話されました。

村越氏は昭和十四年生まれです。我孫子第一小学校の卒業生であり、小学生時代の昭和の我孫子について語られました。第一小学校の校歌についてのお話しでは、校歌の作詞は高橋掬太郎、作曲は杉山長谷夫であり、ご自身で1番・2番とお歌いになり、校舎や校庭の話、雪の日のぬかる校庭、霜柱の道や凍った坂道の話から、4年生の時に常磐線の蒸気機関車が電化され小学生が取手まで招待乗車されたこと、手賀沼がまだとてもきれいで泳いだこと、宿直の先生と宿直室に泊まり込んで勉強をしたことなど、想い出話をされました。我孫子の町並みについては、追分三叉路の話も少しされ、我孫子一丁目から三丁目までの区割りで一丁の長さは百メートルであることなどを楽しく話されました。

後段の奇術実演ではトランプ模様の変化をさまざまに実演し、私を含め皆さんがあっけに捕らわれる程の華麗なカードさばきを披露し、次には紙幣の大きさの白紙が千円札に変わり、千円札が五千円札に、五千円札が一万円札にあっという間に変化する手品の実演、さらに五百円玉が小さなガラス瓶の中に入り込む手品などを披露していただきました。最後に魔方陣を多少のおとぼけを含めながら、全て違う数字で埋めた方陣の縦・横・斜めの数字を合計し、すべての合計を同一にする技を披露して、奇術を修了しました。

最後の質問コーナーでは、我孫子の楚人冠邸別棟に一時居住した坂西志保さんのお話し、GHQの占領下での我孫子街道「料亭角松」前のカーブで米兵が起こした交通事故の話、現在工事中の回春堂医院跡地にはマンションが建設される予定であるなどが話され、とても中身の濃い楽しい「放談くらぶ」が行われました。講師役の村越さんに感謝したことを報告致します。

志賀直哉ゆかりの回春堂医院

越岡　禮子

志賀直哉のホームドクターとして知られる寿一丁目にあった回春堂医院の跡地に地上十三階、九十六戸のマンションが建築中と聞き、現場に行ってみた。現在は地盤固めの段階のようで、高い塀の中に背の高い重機が聳えていた。

私が初めて知った時の回春堂は志賀の時代と違って内科医ではなく、すでに荒井歯科医院となっていた。昭和四十年代末の頃だ。建物も最近迄あった瀟洒な佇まいでなく、まだ古い建物であった。萱葺の旧名主邸の小熊甚左衛門家と成田街道を挟んであり、この度、低い屋並の趣ある一角が失われているのは残念だ。

回春堂について書き留めて欲しいとのことで、地元の古老達から教えて頂いたことなど少しまとめてみた。

初代回春堂医師、荒井茂雄は明治七年、我孫子に生れ、旧名を菊松という。生家は江戸期に幾度も名主や村役人を務め、屋号は茂右衛門。明治二十八年十二月開院。慈恵医院医学校卒業後の二十三歳の時である。開院当日は、祝宴は勿論、花火も打ち上げられて地元の人達は大歓迎したという。すでに白山にあった天祐堂医院長、柏の巻石堂医院長からも祝い金が届いたという。大正五年には我孫子尋常高等小学校で初めての校医になっている。また荒井医師は、口ひげを貯えていたことが志賀直哉の『和解』に記されている。

(写真は回春堂医院の玄関前(S29年頃、「我孫子みんなのアルバム」から)

荒井医師は志賀作品や志賀の日記に度々、登場していて、当会の初代会長の兵藤純二氏の研究によれば、大正十一年一月から翌十二年三月までの間に志賀家への往診は二十二回と記されている。代表作の『和解』の中に直哉が回春堂に重病の慧子(直哉の長女、生後五十六日)を抱いて駈け込んで来た時の緊迫した様子が描かれているが、この時のことは私自身、その場に居合わせた秋谷半七氏から事細かに幾度も話を聞いたことがある。秋谷氏は当時八歳、のちに郷土史家として活躍された人である。『和解』に

はその非常時の様子が子細に描かれているが秋谷氏の話と矛盾がなくそのままである。秋谷氏の著書『手賀沼と文人』にはこの時の証言とともに当時の回春堂医院の内部が紹介されている。当時（大正五年）はまだ茅葺の建物で、入り口に広い土間があり、左手に広い畳の部屋が二つあり、奥の部屋が診察と治療室、その一隅にベッドがあり、反対側に治療用の机と椅子があったという。土間の右手は薬局が設けられていて、土間には当時この町では珍しかった二十八インチの自転車がおいてあり、往診にも用いられていたという。近くに住む杉村楚人冠も大変な自転車愛好者であったと伝えられている。町中で二人が出合い、互いにペダルを踏みながら挨拶を交わすこともあったかも知れないと微笑ましく想像してみた。（写真は**「現在の回春堂医院」（S53年頃、秋谷半七著「手賀沼と文人」から）**

志賀家では直哉自身の坐骨神経痛、幼い娘の種痘や夫人の歯痛など、折にふれて荒井医師の治療を受けていた。昨年、テレビで放映された志賀の作品『流行感冒』は大正七年に大流行したスペイン風邪がテーマである。志賀家で実際にあったことならば、この時も登場人物の誰かが荒井医師の診察を受けていたかもしれない。

当時、荒井医師は志賀家に集まる文士達と囲碁や将棋を楽しんでいたという。中勘助、滝井孝作なども記録されている。地元の人達と交流が薄かったと伝わる白樺文士達と荒井医師は地元で最も親しい存在であったようだ。

大正十三年三月に志賀が我孫子から去るにあたり、荒井家に橋本雅邦の「寒山拾得」、蘇鉄一鉢、兎やの最中、それから上野山清貢の「牛」の絵が餞別として贈られたが、この「牛」の絵は現在、他人に貸したままで不在という。余談であるが、上野山の妻は閨秀作家として知られる素木しづである。極貧のしづが武者小路実篤と志賀家に夫の描く「牛」の絵を売りに我孫子に来たことはよく知られている。上野山の描く牛の絵はのちに高い評価を受けるようになる。武者小路も「新しき村」に移る時、日頃世話をしてくれた近くの浅野家へ餞別として置いて行った。この絵は今も浅野家で大切に残されていると聞く。

（写真は**回春堂医院跡のマンション建設工事（R4年6月）**

荒井医師は昭和四年三月、五十六歳で亡くなっているが、この時も奈良市高畑に住む志賀から香典が寄せられている。現在、荒井歯科医院は荒井医師の曾孫にあたる荒井英徳氏が我孫子駅南口に「アライ歯科クリニック」を開いている。

（プロジェクト報告）百人一首を楽しむ会（番外）

美崎　大洋

今月の歌（恋の歌その15）

明けぬれば　暮るるものとは　知りながら
猶恨めしき　朝ぼらけかな　（52）

【現代語訳】

夜が明ければまた日が暮れる。それが自然の成り行きというもの。そしてまた夜になれば、愛しいあなたに逢えるのだから、愛し合った素晴らしい夜が夜明けとともに終わるのをそうまで恨むこともない。

頭では分かっているけれどもやはり恨めしい、この朝ぼらけよ。

【語句】

【明けぬれば】「明け＋ぬれ（已然形）＋ば」は「こうしてすでにもう（夜が）明けてしまったので」。**【なほうらめしき】**やっぱりうらめしい。**【朝ぼらけ】**夜明け方、別れて帰る時刻をさす。

【作者】

藤原道信。太政大臣・藤原為光の三男。中古三十六歌仙の一人。寛和2年（986年）伯父・兼家の養子として淑景舎（しげいしゃ、後宮のひとつ）にて元服。右兵衛佐、左近衛少将、左近衛中将兼美濃権守などに任官。正暦5年（964年）正月には従四位下に叙されたが、同年7月、当時流行していた天然痘により卒去。享年23。和歌に秀で、奥ゆかしい性格と評されたという。懸想し恋文を贈った婉子（えんし）女王（為平親王の娘）が藤原実資に嫁してしまったのちに詠んだ和歌が『大鏡』に伝わる。また、藤原公任（55番）・実方（51番）・信方などと親しかった。『拾遺和歌集』（2首）以下の勅撰和歌集に49首が入首している。家集に『道信朝臣集』がある。

彼の母親は藤原伊尹（これただ）の娘。伊尹は、数々の謀略を巡らして藤原家の勢力を伸長させた末に「摂政」という地位まで上り詰めた途端、49歳で急死してしまい、世上、「陥れられた人々の呪いか？」と囁かれたという。その呪いの鎖を断ち切るため、という訳でもあるまいが、道信は伊尹の弟（即ち彼の伯父）藤原兼の養子となり、左近中将（従四位上）まで出世したが、僅か23歳で病死した。

関連**狂歌**

生まれては死ぬるものとは知りながら
なほ恨めしき我が心かな

あけぬれば下がるものとは知りながら
なを恨めしき米問屋かな

明けぬれば年と歌とを問われけり
三十路一もじ三十字一もじ

第三十五回短歌の会（最終採択の一首）
五月二十四日実施

沼縁に桜尋ねて道遥か
帰路は果なし夕影長し
村上　智雅子

居ながらに注文したもの手に届く
だれかが担う水鳥の足
納見　美恵子

在りし日の割烹着すがた思ひだす
秋刀魚七輪白菜漬け樽
佐々木　侑

在るがまゝ生き得て今日の安き日に
「徒然草」をひとり読み継ぐ
飯高　美和子

天心や大観想う六角堂
五浦岬に赤く映え建つ
芦崎　敬己

「そうだよ」と素直に返せぬ訳のあり
「やさしいのね」の君の言葉に
美崎　大洋

生と死のあはひを沮む川あらば
かちわたりゆかむその時やいつ
伊奈野　道子

枯れ庭の小さき日向に草萌えて
気分はいっ気に春となりけり
大島　光子

文学掲示板
令和四年九月展示作品（文学の広場）

胸の内明さぬつもりにサングラス
目立たぬ色を然りげ無く選る
八千代市　藤川　綾乃

紙風船とまがうばかりに膨らみて
桔梗のつぼみはじけて咲きぬ
我孫子市　美崎　大洋

万葉の創作オペラたけなわに
老師と若人共鳴極まる
我孫子市　村上　智雅子

「そんなこと聞いていない」と胸張って
娘に言いたるもメモの出て来る
柏市　納見　美恵子

オリオンとサソリ教へし君みるや
我を見解けばむかへに来たれ
我孫子市　佐々木　侑

あぢさゐの葉をつかみゐる抜殻を
出でたる蝉か今声上ぐるは
我孫子市　三谷　和夫

当会の行事予定

□「放談くらぶ」
日時　8月21日(日)14時～16時
会場　あびこ市民プラザホール
講師　倉岡裕之氏
演題　「山岳ガイドという仕事」
参加費、会員無料、非会員三〇〇円
申し込みTEL七一八五)〇六七五　佐々木まで
（13ページ「あびこだより」参照ください）

□　市民のチカラまつり　講演会と史跡巡りでの参加

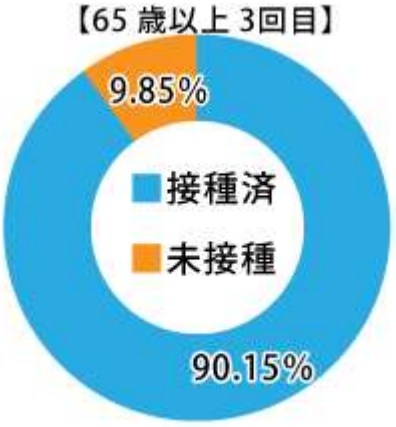
講演会
日時　11月5日(土)　13時～17時
場所　近隣センター「ふさの風」
テーマ　将門伝説・伝承を探る(その2)
史跡巡り　（詳細未定）

プロジェクト「短歌の会」

第三十六回短歌の会
日時　7月19(火)13時30分～
場所　けやきプラザ10階小会議室

我孫子市　新型コロナワクチン接種状況
3回目（令和4年7月5日時点の速報値）

年齢	対象者数	接種者数	率（%）
12 歳以上	121,538	85,786	70.58
65 歳以上	41,814	37,697	90.15
12～64 歳	79,724	48,089	60,32



編集後記　泥沼のロシア・ウクライナ戦争だが、破壊し尽された街の悲惨な状況を見る度、街を再建・復興するのは大変なことだろうと思う。「消費が投資を生む。そして最大の消費は戦争である」と昔、学んだ(聞いた)ような気がする。戦争で破壊された住宅やビルが莫大な投資額によって次々に建て直されていく様子は、いかにも活力に溢れて経済が成長しているように見えるだろうが、戦争がなかったら、住宅やビルは破壊されなかったし、再建に充てられた投資額は他の目的に使われ、企業は消費者が本当に欲しがる商品やサービスに力を入れ、社会をより豊かにし、経済成長も地に足のついた、息の長いものになる筈だ。（美崎）